胡桃（くるみ）の家

林 真理子

新潮文庫

胡桃の家

新潮文庫　は－18－1

平成元年十一月十五日　印刷
平成元年十一月二十五日　発行

著者　林真理子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Mariko Hayashi 1986　Printed in Japan

ISBN4-10-119111-5 C0193

胡桃（くるみ）の家

目次

玉呑み人形……七
女ともだち……六一
シガレット・ライフ……一六七
胡桃(くるみ)の家……一八九
解説　川本三郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

胡桃（くるみ）の家

玉(たま)呑(の)み人形

冬になると、三輪田屋からパンがとどくことが多くなる。
ガラス棚にむき出しで並んでいた菓子パンは、次の朝にはすっかり固くなっていて、もう売り物にはならない。それを祖母のきぬは何個かわたしてくれるのだ。
この頃特に寒い日が続いていて、パンは売れ残るようだ。母のとく子が釜のふたをとると、必ずといっていいほど湯気の下に四角や丸いかたちの菓子パンが見える。炊き上がったばかりの飯の上にほうりこまれたパンは、飯がむれる間にやわらかく熱くなって、槇子はこれがなによりの好物だった。
飯粒だらけのパンを割ると、中から舌が火傷しそうな餡やクリームがとび出す。舌の先でちょろちょろとそれをなめると、世の中でこれほどおいしいものがあるだろうかと思うほどだ。中でもジャムパンには目がない。今も兄の圭一が目をそらした隙に、二個めをすばやくつかんだばかりだ。
「ちゃんとご飯も食べなきゃ駄目だよ。そんなにパンばっかり食べてちゃ大きくならないからね」
とく子が味噌汁をよそいながら言う。甘い大根のにおいが流れてきて、槇子はそちらにも心を動かされた。おまけに今朝の味噌汁には玉子が入っているらしい。母が〝本家〟とよぶ

隣りの三輪田屋では、きぬも叔母の良江もみんな玉子を落とした味噌汁を飲む。けれども槇子の家では玉子入りは三日に一度だ。

「うちは貧乏だから、毎日玉子を食べられないんだろうか」

槇子は食べかけのジャムパンを持ったままふとそんなことを思った。時々母が祖母に小声で話しているのを耳にする。

「こんなにお金がなくて、子どもをこれからどうやって育てていこうかと思って……」

槇子はこたつの向こう側の父親を見た。二人の会話はその後こう続くのだ。

「もうちょっと、うちの人がなんとかしてくれるといいんだけど」

「源吉は駄目だ。あれは本当に駄目だ」

祖母のきぬは叫ぶように言った。実の娘のグチをもう続けさせないほど、それはきっぱりしたものだった。娘婿をかばっているのではない。これ以上源吉の話をするのに祖母はたえられないようなのだ。

祖母が父親を嫌っているというのは、ずっと前から槇子にはわかっていた。

「マキはあんなお父さんで可哀相だな。な」

そう言ってきぬは槇子の頭をよく撫でる。そしてその後で売りものの飴か小銭を必ず握らせてくれるのだ。祖母からもらうものにはいつもうっすらと漢方薬のにおいがついていた。そしてそんな硬貨を掌に置くと、槇子は本当に自分が哀れな少女のように思えてくる。自分

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

がよくわからないところで、とてつもなく大きな不幸が存在しているような気がするのだ。

新聞から目を離さずに父は箸をとった。どうやら玉子は父の味噌汁にだけ入っているようなのだ。祖母が言うさまざまな「可哀相な」ことの元凶なような父に、母はいつもこうして遇している。そしてそのことがよく槇子を混乱させるのだ。

「お父さんを恨んじゃいけないよ」

とく子は時々そんなことを言う時があった。

「みんな戦争がいけないんだからね」

小学校の近くの下駄屋のおじさんは片目がつぶれている。なんでも戦争に行って鉄砲にうたれたそうだ。父の源吉は両手も両足もぴんぴんしている。それなのに母はどうしてそんなことを言うのだろうか。

「からだが元気だって、戦争にやられてたことだってあるんだから」

もっとわからない。それに祖母や叔母がせつなげに言うほど、槇子は自分のことをそう可哀相だとは思っていないのだ。母はしょっちゅうう ちは貧乏だとこぼすけれど、本当にそうだろうか。玉子は毎日食べられないけれど、着るものも持っているものも他の友人に比べて決して見劣りしない。それどころか、槇子の洋服はこの田舎ではめったに見られないほどしゃれていると皆に言われる。

それは東京に住んでいる母の親友が譲ってくれたもので、そこの家には槇子より二つ年上の少女がいるのだ。もう着れなくなったワンピースやスカートを、そこの家ではよく小包みにして送ってくれた。ラシャでつくられたフレアースカートも、プードルの模様のブラウスもどれも新品のようだった。

これを着ていた少女に、槇子はいっぺんだけ会ったことがある。電車をいくつも乗りかえたところにその子の家はあって、きみどり色のマサキがまわりをとりまいていた。ピカピカ光るガラス窓や、レース編みの椅子カバーというのはいかにもこざっぱりとしていて、槇子はかなり居心地の悪い思いをしたものだ。槇子の住んでいる町では、こういう家は医者を父親に持つ友人の家と限られている。遊ぶ時もなるべく避ける場所だ。

少女は想像していたよりも可愛くもなければ、そう都会っぽいこともなかった。ただピアノを弾けることが槇子をおじけづかせた。そのピアノの上にも、椅子と同じ柄のレースがかかっていて、少女はいかにもものなれたようにそれをめくったのだ。

「本当は人さまにお聞かせするほどうまくないのよ。だけど少しはやる気を出してくれなくっちゃ」

歯切れいい言葉をつかう少女の母親は、薄い藤色のカーディガンを着ていて、それはとても綺麗だった。母のとく子の方がずっと年上に見えると槇子は思ったほどだ。

紅茶を飲んだ後、少女は槇子を自分の部屋によんでアルバムを見せてくれた。まだ小学生

なのにみんなセーラー服を着ている。少女はある私立の学校の名を得意気に告げたが、槇子にはわからなかった。

とはいうものの、その家を辞す時、槇子の胸の中に羨望が生まれたのは本当だ。いつまでもしつこく吠え続けるスピッツに閉口しながら門を出た後、槇子は言った。

「あのうち、きれいだね。あんなうちいいね」

「槇ちゃんだって――」

母はなぜかその時薄く笑っていた。

「あのうちの子みたいになれたんだよ」

「嘘だ」

胸が怖いものを見た時のように早い動悸をうちはじめるのがわかる。

「本当だよ。お父さんが戦争から帰ってきてちゃんと元の会社に勤めてたら、槇ちゃんだって、お嬢さんっていわれてたよ」

それ以上聞きたくないと槇子は思った。わけもわからない悲しみが襲ってきて、槇子は不意に涙ぐみたくなったほどだ。

「槇ちゃんは本当に運が悪いよ。ついていないんだよね」

とく子は何度も唱うようにつぶやき、その言葉は自分自身に向けられていることはすぐにわかった。なぜならとく子は、槇子を見つめることもせず、住宅地の空をゆっくりと染めて

いく夕焼け空を眺めていたからだ。

「運が悪い」というのがどんな状態をさし、どんな人々をさしているのか、槇子にはほとんどわからない。けれどもそれを口にする時の、おとなたちの表情ははっきりと思い出すことができる。そしてそれは槇子の大嫌いなものだった。なぜなら「運が悪い」と、父の悪口はいつも共に存在しているものだったからだ。

「姉さんは運が悪いんだよ。あんな亭主だったら、私お嫁にいかなくたっていいよ」

そう言うのは叔母の良江だ。とく子とは十近く年が離れている妹で、もう三十歳をすぎている。この町の女の中で、いちばん早く車の免許を持った良江は、毎日のようにライトバンを乗りまわしていた。良江があんなふうに男のようなことをして、いつまでも結婚しないのは、きぬが三輪田屋を継がせたがっているからだと皆が噂している。長男の実は、良江よりもふたつ上だが、東京の私立大学を六年かかって卒業した後、弁護士をめざすという名目で職についていない。すでに妻がいながら、今だに仕送りを受けているのだ。

「三輪田屋の総領は、どうも出来が悪いらしい」

と口さがない人々は言っているらしいのだが、きぬはほとんど盲目的に息子のことを信じていた。早くして未亡人になった後、老舗の菓子屋をここまで持ちこたえてきたきぬも、こと息子のことになるとこれほど甘くなるものかとまわりの人間を辟易させた。

「実の勉強を続けさせるために、わしゃ三輪田屋のひとつやふたつ潰れたって本望でごい

す」

そう言ってきぬは、もう曲がりかけた腰をひょいと伸ばすのだ。

「それにしても」

ときぬは言う。

「とく子の運のないこと。あの婿だけはわしの見込み違いでしたわ」

そういう時のきぬは、いかにも口惜しそうに唇をゆがめるのだ。

「あれはいつの頃だったかねえ」

母親のとく子が、ゆっくりとゆっくりと喋り出したことがある。槇子と一緒に昼寝をしている時だ。母の声はゆっくりと低く、それはまるで子守唄がわりのおとぎ話のように聞こえた。

「お父さんが戦争から帰ってきてすぐのことだったっけ。三年も収容所に入れられていたから、帰ってくるのが遅くてね。私もひょっとしたら死んでいるかと思ってた。だから無事で帰ってきた時、お婆ちゃんはそりゃ喜んでね、親戚中集めて毎日宴会だよ。春のことでね、お父さんは筍ご飯が大好きだっていうんで、お婆ちゃんはさっそく炊いたんだよ。そしたらお父さん、何杯食べたと思う。どんぶりに四杯だよ。お婆ちゃんは鬼みたいに怒ってね。限度っていうもんを知らない、育ちが悪いってカンカンになったんだよ」

そしてクスッと笑った。

「筍ご飯をどんぶりに四杯だよ。あんなに痩せたからだのどこに入ったかって思ったよ」
あの時、どうして母はそんなことを言い出したのだろうか。やっぱり父のことが話題になっていたからに違いないと槇子は思う。
母の傍には、きぬ、良江、そしてお手伝いの信代が横たわっていた。
真夏になると、店番を誰かにさせて、順番で午睡をとるのが三輪田屋の習慣だった。いつもは水飴を瓶に詰めたりする露地横の部屋は格好の場所だ。天井が高いから、風がたっぷりと吹いてくる。そこに女たちは思い思いのくつろいだ姿勢でまどろむのだ。
竹で編んだ箱枕を手離さないのはきぬで、使っても使わなくても右手には必ずうちわを持った。良江はタオルを首にまいて、最後には目にあてたりする。
三輪田屋の女たちは大柄なのが特徴で、明治生まれのきぬも背が高い。とく子も良江もむっちりと肉がついていて、色が白いからなおさら目立つ。食べ物には奢る家だったから、お手伝いの信代も年頃の娘らしいやわらかい線のからだになっていた。
暑さのために三人の女たちは、スカートを太ももまでまくり上げていた。特に見事なのは良江で、隙間のない太ももは汗でかすかにぬめり光って見える。蠅が何度かそこに止まっては、ピシャンと叩かれた。
「今年は蠅が多いねえ」
良江が天井を眺めながら言った。三輪田屋は食べ物商売ということもあって、いたるとこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com